2013 年度 卒業論文

地域コミュニティとしての
商店街の可能性
―西荻窪神明通りの今とこれから―

塩原良和研究会
5 期 宮廻杏奈

目次

序論　研究の動機

第１章　商店街の地域コミュニティとしての機能

第２章　西荻窪の地域性

1. 歴史的考察

2. 地理的考察

3. 文化的考察

第３章　西荻窪の商店街に関する考察

1. 北口と南口の商店街比較

2. 神明通りの商店群

3. 衰退の原因に関する考察

4. 憩いの場、語りかける看板

5. 神明通り共和会の新店舗

6. 駅北口方面のパンフレット

7. 西荻窪案内所と西荻夕市・西荻学習会

第４章　実地調査の考察

終章　結論

序論　研究の動機

人々の生活に地域コミュニティの機能を復活させる方策を考察することが、この論文の目的である。その動機として、筆者自身が東京都23区の東側と西側を跨いで幼少期を過ごした経験と、東日本大震災によって起きた人々の価値観の変化を挙げたい。

1つ目は、東京都23区の東側に位置する葛飾区、そして西側に位置する杉並区で過ごした幼少期に、幼いながらに感じた地域コミュニティの「濃さ」のギャップである。東京都の中でも千葉寄りに位置した葛飾区は、下町と呼ばれる雰囲気が残った地域である。筆者がこの地域に属する柴又で暮らした1993年～2002年の間でも、下町の習慣や人情が生活の中に残っていた。例えば、地域の小学生は放課後になると駄菓子屋で待ち合わせ、お店のおばちゃん（通学路に位置するこの駄菓子屋のおばちゃんは、通学時刻になると毎朝2階から手を振ってくれた）と世間話をしつつ10円単位のお菓子を買って「しばこう」か「うらこう」と呼ばれる近所の公園へ繰り出すのが定番だった。また、社宅の3階では、廊下を使って日々様々なイベントが行なわれていた。ある日はチョークを使って大落書き大会が行なわれ（もちろん、終了後には全員で水をまきながら消す）、またある日はレジャーシートを広げて全家族で夕食ピクニックをして配達員を驚かせたこともあった。いつでも扉は開けっ放しになっており、廊下を介してどこの家にでも子供達は自由に出入りすることができた。このような経験を振り返ると、葛飾区柴又の生活は、人と人の距離が近くて濃く、支え合って成り立っていたように感じられる。

しかしまた一方で、東京23区の西側に位置する杉並区西荻窪の幼少期も経験した。2002年に移り住んだ当時、子供の生活環境の違いにカルチャーショックを受けたことが印象深い。この地域にはインターナショナルスクールや会員制のスポーツクラブや学習指導塾等があり、子供の教育環境が充実しているためか、教育熱心な家庭が多い。それゆえ、放課後に公園で遊ぶ子供の姿が見られるのは稀で、ほとんどは習いごとに行くか家の中で遊んでいた。また、気が向いた時に自由に出歩く場所が無く（また1人で出歩くのも怖く）、外へ出歩くためには友達の1週間の予定を把握した上で遊びの約束を取り付ける必要があった。このように、東東京と西東京でそれぞれ約10年ずつの生活を送る中で、土地ごとに地域コミュニティの在り方に大きな差があるということを感じるようになった。これが、地域コミュニティの在り方について関心を持つようになった契機である。

2つ目は、東日本大震災を通して経験した世間の地域コミュニティへの注目と、宮城県南三陸町で復活した「さんさん商店街」との出会いである。2011年3月、東日本大震災に見舞われた直後から数カ月間、世界のどこよりも安全だと思い込んでいた日本が想像以上に脆いことを思い知らされていた。テレビのチャンネルはどこも感謝の気持ちや「前を向こう」といったメッセージと報道に埋め尽くされ、メールやインターネットでのみ繋がっていた人間関係から切り離されている異常な期間を経験した。正直、柴又の地域性を強く想ったのはこの時が初めてだったように思う。同じように、テレビや、グッズを通して、日本中に「絆」の文字が溢れていたことから

も、日本に住む多くの人がこの経験を機に人々の繋がりや地域コミュニティの重要に注目するようになっていた。レベッカ・ソルニットは『災害ユートピア』で、災害の時こそこのように人々が助けあう特別な共同体が立ちあがると述べていたが［レベッカ・ソルニット, 2010]、その期待とは裏腹に時間が経過するにつれてそのような動きは減り、大震災直後の助け合いの言葉は世間から消えつつある。しかしその一方で、多感な世代の若者の中にはこの経験で人との繋がりに幸福を強く感じる層が存在するともいう［内田由紀子, 高橋, 川原, 2011, ページ: 1]。それゆえ、私はこのように人との繋がりを重視した価値観を持つ人々が生まれたタイミングに、近年薄れつつある地域コミュニティの在り方について見直したいと考えた。

上記のように地域コミュニティの可能性を考え始めた際、ボランティアで通っていた宮城県南三陸町志津川地区にある「南三陸さんさん商店街」という仮設商店街に出会った。この商店街がある志津川地区は、東日本大震災の被害を大きく受けた地域のひとつである。志津川はかつて、小学校や中学校、路面電車、多くの住宅が広がる町だった。現在も志津川のほぼ全域がさら地の状態だが、地元の力によっていち早く復活したのが「南三陸さんさん商店街」である。約 30 店ほどの建物自体はプレハブであるものの、商店街のゲートや歩道は綺麗に飾られている。2013 年 5 月時点では、周囲がさら地のままなのに対し、商店街にはシンボルのモヤイ像が新調されようとしていた。しかし、この商店街が出来た 2012 年 2 月頃、周辺にはまだ撤去しきれていない瓦礫が残っている箇所もあった。そのような状況下で、町が何よりも早く商店街を復活させたのは、物資の供給や雇用の確保という経済活動の側面以外にも要因があるように思う。なぜなら、合理化を図れば綺麗に飾られたゲートや歩道は二の次になるはずだからである。この例から、商店街は実用面を越えた精神的な役割をも担うものとして、地域コミュニティの場所になりうるのではないかと考えるようになった。

以上の理由から、地域コミュニティ機能の担い手のひとつとして商店街に注目している。そこで、地域コミュニティの弱さを実感した西東京・杉並区西荻窪にある商店街の実態を、それが現在地域コミュニティの場としてどう機能しているのか、今後どのような役割を果たすようになるのかという視点から調査した。そこで明らかになったのは、性質の変化と商店街をつなぐ第三者の存在の必要性であった。

その為、本研究では、杉並区西荻窪付近で参与型観察のフィールドワークを行なった。その際には、定性的調査方法論を専攻されている佐藤郁哉氏の方法論を参考にした。佐藤の方法論では、参与型観察を行なう際の注意点として、「過剰な感情移入」が挙げられている［佐藤郁哉, 2008, ページ: 173]。多くの場合、調査者は未知の土地で生活をすることで観察者から参与者へと段階を進めていく。それに対し、筆者は調査対象地で既に十数年の生活を送っている。つまり、本調査を行なう際には、参与者から観察者への視点の変更という、通常とは逆方向への意識が必要であると考えた。

佐藤は、アメリカの社会学者ジョージ・マッコールと J・シモンズが行なった、参与観察の 5 つの調査技法を挙げ、参与観察の段階分けを参照している［佐藤郁哉, 2008, ページ: 161]。5 つ

の調査技法とは、①社会生活への参加　②対象社会の生活の直接観察　③社会生活に関する聞き取り　④文書資料や文物の収集と分析　⑤出来事や物事に関する感想や意味付けについてのインタビュー　である。そのうち、①から③を中心とする調査活動は、調査地への社会活動へ主体として参加しながら、そこで起きた出来事を感じとる作業が中心となる。そして、④から⑤を含めると、参加しながら観察するより、完全な観察者としての立場に近くなる。今回は、調査地の参与者であるところから観察者への転換を試みる為、④、⑤の調査技法が適切になるだろう。したがって、本調査では、地理、歴史の文書資料の収集や、住民の声を聞くといった客観的な作業を取り入れることにした。

第 1 章　商店街の地域コミュニティとしての機能

この章では、商店街が誕生した過程を確認することで商店街が地域コミュニティの担い手になる可能性を備えていることを明らかにする。

「商店街」とは、個店が集積している地区や、集積した個店を構成する団体のこと [堀川三好, 野中, 菅原, 2011, ページ: 19]を指す。経済産業省では、「小売店、飲食店及びサービス業が、近接して 30 店舗以上あるもの」としている [経済産業省, 2009]。全国に広く分布する商店街だが、その興り方については様々な研究がなされてきた。

新は商店街の成立と、近代における人口流入との繋がりを強く主張している。商店街は一般的に伝統的なものと捉えられがちだが、実は 20 世紀に発明されたものだ [新雅史, 2012, ページ: 25]と新はいう。20 世紀前半、地方の農業従事者が都市部に移り、主に零細自営業や小売業に就くようになった。これが、いわゆる都市流動化による農民の減少と都市人口の急増である。当時の零細小売業は、質素な店舗、屋台での商いや行商が多かったため、競争を勝ち残る為に、零細規模の商売従事者を増やさない、貧困化させない方策を模索し始めた。

さらに、同じく大正 12 年頃、それまで上層を相手にしていた百貨店の顧客層が大衆へと拡大しはじめ、商店街を担う零細小売業は百貨店に対抗する必要が生じる。しかし、当時の零細自営業は、専門性のないままそれぞれが勝手に商売をしていたため、百貨店に太刀打ちできなかった。それゆえ、零細自営業は各々が専門性を身に付け、ひとつの地域に集積し、専門性の「横」のつながりを生むことで百貨店に対抗しようと試みた。このように発達した商店街は、「横の百貨店」とも称されるようになり、零細自営業ひとつひとつが専門性を高め、商店街として組織化されるようになった。それゆえ、住民にとっては生活の買い物が一気に済むようになった。今では多くの商店街にアーケードや街路樹があるが、このような試みが各地で始まるには、「商店街」という理念の組織化が必要だったのである。その結果、特定の地域に腰を据え、地域を良くすることで自らの商売を安定化させようとした [新雅史, 2012, ページ: 81]。これが、「よい地域」を作る「商店街」の発明の始まりである。

また、地域を担う「商店街」には 3 つの理念が含まれているとされている。零細小売業が対立していた協同組合、公設市場、百貨店の長所である、①百貨店における近代的な消費空間と娯楽性、②協同組合における協同主義、③公設市場における小売の公共性という 3 つの要素である。[新雅史, 2012, ページ: 69]。このようにできた商店街は、提供される財やサービスの到達範囲によって「超広域型商店街」、「広域型商店街」、「地域型商店街」、「近隣型商店街」に分けることが出来る [田村三智子, 2007, ページ: 16]。

以上のように、「商店街」という理念は、零細自営業を保護するという機能に加え、地域に密着し、地域の環境を改善しようとする働きがあることが明らかになった。つまり、商店街は自らが地域コミュニティの主体を担うことで居住環境の改善や地域住民との交流を深め、地域コミュニティによって支えられて成り立っている。それゆえ、商店街は地域コミュニティを担い手としての機能を備えた概念であるといえる。

第 2 章　西荻窪の地域性

この章では、まず本論文で扱う商店街が存在する西荻窪が、東京の中でどのような位置付けにあるのかを分析するため、現在の状況を簡潔に説明した後、歴史的側面、地理的側面、文化的側面から調査地を考察する。その際には、文書、地図を初め、後半で取り上げる西荻学習会[1]にて現地住民及び杉並郷土博物館で活動されている野田栄一氏から聞き取った情報を参考にした。

1. 歴史的考察

この項では、西荻窪一帯の町が形成・発展してきた経緯を、文書及び住民への聞きこみか得た情報を基にして考察を行なう。

現在の「西荻窪は、東京 23 区の杉並区に属し、JR 西荻窪駅周辺の地域一帯を指す。一般には、「西荻」という住所が付く場所だけでなく、松庵や南荻窪、善福寺等も含まれることが多い。西荻窪駅は、中央総武線が繋ぐ新宿-吉祥寺間に存在するものの、休日は中央快速線が停車しないことから、この地域には大型商業施設が無く、閑静な住宅街と個人商店を発達させてきた。現在、西荻窪駅周辺には 23 もの商店街が存在[2]し、特に個人経営のアンティーク店、喫茶店、古書

[1] 2013 年 12 月 7 日第 5 回。かがやき亭にて。参加者約 20 名。
[2] 筆者調べ（2013.12.7）。宿町商興会、女子大通り商和会、西荻北銀座商友会、西荻一番街商店街、西荻伏見通り商店街振興組合、西荻北銀座銀商会、地蔵坂協和会、西荻北銀座本町会、西荻南口仲通り商店街、西荻窪銀座会、サカエ通り商店街、松庵商店街、西荻窪駅南通り会、西荻窪南本町会、五日市通り商店街、西荻南銀座会、西荻南中央通銀盛会、西荻東銀座会、西荻平和通り会、神明通り共和会、西荻ステーション街商店街、西荻東三条通り伸興会、広小路新栄会。以上の商店街は杉並区西荻窪商店街連合会に属している。

店は雑誌等に多く取り上げられてきた[3]。

その西荻窪を含む杉並区周辺は、約 1 万年前から人が生活していた証拠が確認され[4]、江戸時代に 20 の村に分割、主に江戸市民への野菜の供給を担う農村地帯であった。現在の西荻窪は 20 の村のうち、青梅街道付近を占める上荻窪に含まれていた。明治 21 年、杉並の 20 村は、杉並村、和田堀村、井荻村、高井戸村の 4 つの村へ統合される。当時、井荻村の町長を務めていた内田秀五郎氏は、区画整備や下水道整備等のインフラ整備を行なう一環として、鉄道の誘致を行なった。これが、既に明治 22 年に新宿-立川間を開通させていた中央線［西荻窪駅, 1972, ページ: 6]に、大正 11 年、西荻窪駅を設立させるきっかけのひとつとなった。西荻窪駅は、北側は井荻村に、南側は高井戸村に挟まれる場所に定められた。荻窪駅（明治 24 年）と吉祥寺（明治 32 年）に続く開駅であった。翌年、関東大震災が発生した影響による人口の郊外流出が始まり、この地域一帯が戦災を受けなかったことも幸いし、西荻窪駅周辺の人口は急増していく。一説としては、大正 11 年西荻窪駅開業当時の 1 日平均乗降客は約 700 人だったが、8 年後の昭和 5 年には約 13,000 人に、20 年後の昭和 25 年には約 59,000 人、さらに 21 年後の昭和 46 年には約 99,700 人にもなったと記されている［西荻窪駅, 1972, ページ: 1]。

また、昭和 40 年～47 年頃の現存する写真には、西荻窪駅周辺には、現在とほぼ同じ場所に商店街が形成されていたことが確認された[5]。つまり、西荻窪駅開業と、関東大震災及び第二次世界大戦による人口流入、それに伴う住宅街と複数の商店街の発展によって、現在の西荻窪の原型が築かれていったといえる。

2. 地理的考察

西荻窪及びそれが属する西荻窪は、東京都の中でどのような位置付けにあるのかを考察するために、この項では地理的側面から西荻窪の分析を行なう。

伊藤滋は、東京の路線を境目に 4 区分することで、地域の特色を分析する方法論を提示している。東京 23 区は京浜東北線と東海道線で南北に、中央総武線で東西に 4 区

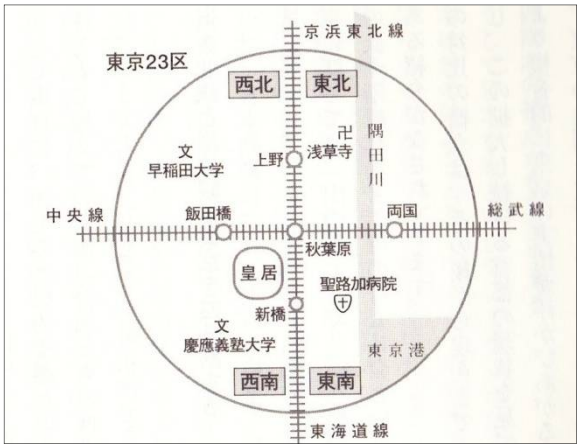

図 1 東京の 4 区分［伊藤滋.2002:36]

[3] 筆者調べ。amazon にて「西荻窪」検索。西荻窪を「喫茶店」「アンティーク（骨董)」「古本」から特集した雑誌、書籍は 14 件ヒット。(2013.12.8)
[4] 現 杉並工業高校付近。
[5] 筆者確認（2013.12.7)。第 5 回西荻学習会にて。確認されたのは、現西荻北銀座商友会、現西荻南口仲通り商店街、現サカエ通り商店街、その他不明箇所 3 箇所である。

分する方法論である［伊藤滋, 2002, ページ: 36］。東京を 4 区分すると、京浜東北線と総武線の間は東北、総武線と東海道線の間は東南、東海道線と中央線の間は西南、中央線と京浜東北線の間は西北となる（図 1）。

この分析の分類方法を採用して地域の特色を確認してみる。まず、東西。過去より日本は鎖国政策を採ってきたため、西洋文化を始めとする新しい文化は日本の西に位置する出島を伝ってやってきた。そのため、東京でも西には新しいものに敏感な江戸からの士族が住む「山の手」が形成された。その一方で東には、東北からやってきた職人気質な人々が住みつき、職人や町人が集まる下町が形成されていく［伊藤滋, 2002, ページ: 47］。下町の代名詞でもある浅草、筆者が幼少期を過ごした柴又は東京の東北部に位置している。西をさらに中央線を挟んで南北に分割すると、西欧からの価値観や学問を多く取り入れた西南と、アジア・民族主義的な価値観や学問を色濃く残した西北に分けることができる［伊藤滋, 2002, ページ: 37］。本論文で取り上げる西荻窪神明通りは、中央線西荻窪駅から南へと伸びている。したがって、伊藤の主張を採用するならば、西荻窪は「江戸からの士族が住み、西欧の文明や価値観に触れやすい」地域に分類される。

図 2　国立駅航空写真(2013.10 所得)

図 3　吉祥寺駅航空写真(2013.10 所得)

図 4　西荻窪駅航空写真(2013.10 所得)

先程は中央線を中心に据えて西荻窪を分類する方法であったが、一方で中央線を外した時にその土地本来の姿を見るという方法も存在する。その方法を主張する根拠としては、中央線は東京都をまっすぐに横断する姿をしているが、そのためにその下にあった土地のアイコンが見えにくくなっているという点が挙げられている。たしかに、山手線外側の西に位置する中野区、杉並区、武蔵野市は江戸の近郊農村であったが、明治中期から昭和初期にかけての鉄道建設、さらに関東大震災を境に駅を中心とした都市化を進めたため、生活圏を鉄道中心に考察することが多い［陣内秀信, 2012, ページ: 19］。しかし、近世の都市がほとんどなかったからこそ、杉並区近辺には地形や神社、古道の名残を持った町作りが見てとれるとされている［陣内秀信, 2012, ページ: 20-21］。例えば、国立は駅を作る前提で作られた町であるため、駅から放射上にのびる街路がある（図 2）。それに比べ、吉祥寺の街路は中央線に対して斜めに交錯して

いる（図 3)。これは、本来からある井の頭通りと五日市街道に対して直角の街路を跨ぐようにして、跡から中央線が建設されたからだと考えられる [陣内秀信, 2012, ページ: 25]。西荻窪駅にも同様の形態を見てとれる。図 4 の中央線を横切る直線は、五日市街道らとほぼ同じ角度で延びる神明通りを分断している。神明通りは、新田道という別名を持ち、大宮前新田開発時に建設されたとされている。また、五日市街道は春日大社に、青梅街道は荻窪八幡へと続いているように、神明通りは大宮八幡裏に続いている。このことから、中央線は古道を分断し、駅を挟んで現在の西荻窪に複数の商店街を出現させる要因のひとつになっているといえる。

上記の考察により、西荻窪はかつて江戸農村部にあったが、関東大震災を経た中央線の創設により、商店街と住宅地を発展させた土地であることがわかった。また、神明通り商店街は、一般的な商店街よりも道幅が広く、車の交通量が多いが、それは中央線に分断された古道の片端であることも関係していると推測できる。

3. 文化的考察

この項では、西荻窪の特色でもある「文化的」「芸術的」「アンティーク」といったイメージを派生させた要因を分析する。その為、「アンティーク街」形成の都市研究、そして西荻窪に暮らした著名人を参考にし、西荻窪を文化的側面から考察する。商店街は生活の一部として発展してきたため、影響力を持った人間がどれほど暮らしていたのかを知る事は、商店街の性格を知るために重要な意味を持つと考えるからである。

前項でも述べたように、西荻窪駅は西欧文化の入り口として文化が栄える地域にある。その為、この周辺には古くから多くの文化人が居住していた。西荻窪及び荻窪で暮らしたことがある著名人には、与謝野晶子、井伏鱒二、太宰治、宮崎駿、楳図かずお等が居る。また、西荻窪駅南口に位置する老舗「こけし屋」には、井伏鱒二[6]をはじめ、田川水泡[7]、徳川夢声[8]、松本清張[9]、そして鈴木信太郎[10]らが常連として訪れていた名残が残されている[11]。

このように多くの文化人が西荻窪近辺に暮らすきっかけを作ったのが、荻窪で生活していたことで知られる井伏鱒二である。昭和 4 年頃、井伏を中心に「阿佐ヶ谷将棋会」 [井伏鱒二, 1982, ページ: 108]と称するグループが設立され、太宰治をはじめに青柳瑞穂、小田獄夫など、彼を慕った文化人が荻窪近辺に集まるようになった。また、西荻窪は物価や家賃が昔から比較的安かっ

---

[6] 1898-1993 年。小説家。著書に『荻窪風土記』（1982 年、新潮社）等。
[7] 1899-1989 年。昭和初期を代表する漫画家。代表作は『のらくろ』等。
[8] 1894-1971 年。漫談家、作家、俳優。日本放送芸能家協会初代理事長。
[9] 1909-1992 年。小説家。
[10] 1895-1989 年。洋画家。
[11] こけし屋看板の洋画。レストランに飾られている原画やそれにまつわる話等。かつて、こけし屋が近隣の文化人を招いて「こけし会」と称する文化講座を開催したことが始まりとされている。

た[12]ことから、生活に困窮することの多い芸術家や小説家の生活に合っていたとも考えられる。

現在は、西荻窪駅から少し離れた場所には、大邸宅が立ち並ぶ一帯も存在するが、昔からのアパートやマンションも多く残り、今でも日常の中で多数の芸術家や小説家、俳優を日常的に目にすることができる[13]地域となっている。

また、このような文化人の存在は、商店街の店の特色にも大きな影響を及ぼしていたことが、次の考察で明らかになった。

西荻窪は「アンティークの街」として知られている事が多い。東京 23 区における専門店街の形成過程に関する研究を行なった籾山真人らの論文においても、東京の主要な複数の都市雑誌に紹介されている[14]専門店街として「アンティークの街、西荻窪」が挙げられている［籾山, 渡辺, 羽生, 2000, ページ: 373]。同調査では、西荻窪のアンティーク街は「自然発生的」［籾山, 渡辺, 羽生, 2000, ページ: 375]に形成されたとしている。その発展要因としては、以下の 7 点が挙げられている。①西荻窪を囲む青梅街道、五日市街道、井の頭通り沿いの大型店舗や、荻窪、吉祥寺の大型商業地域に購買が流出。それによる地元商店街の衰退によって生まれた空き店舗が新規出店の受け皿を作った。②西荻窪の保証金、家賃の相場が安い。③戦災を受けなかったため、道路幅が狭く、戦前からの建物が多く残る[15]ために古い雰囲気がある。また、昭和初期以降多くの作家、画家、学者が移住し文士村的イメージを形成。さらに関東大震災後の東京女子大学移転によって学生街となったことから、カフェや古本屋が多数出現し、文化的イメージが定着した。また、近辺には閑静な住宅街が存在する。これらの土地イメージがいずれも「アンティーク」に合致していたとしている。④脱サラ組が新たにスタートした。⑤バブル景気によってアンティークブームが興った。⑥バブル崩壊後の不況下、商店街に空き店舗が増加し、さらなる新規出店の受け皿になった。⑦店主有志が 1984 年より作成し始めたアンティークマップにより、店同士の繋がりが生まれ活性化したこと、が挙げられた。つまり、西荻窪の文化的イメージと空き店舗の出現、時代背景が合った結果であるといえる。

以上から、東京の西に位置するこの地域には、西欧文化を始めとする新しい文化を育む土地性があったこと。第二次世界大戦の戦災を免れたこの土地へ住民が移り住み、かつそのような人々を受け入れる土地や食料があったこと。そして、井伏鱒二を発端に、多くの文化人、学生が活動をしていたこと。狭い道が随所に残されているために大型店舗が出店しにくく、個人商店が発達したこと。そして地元商店街の経営が悪化し、それを受け入れる時代背景があったこと。「アンティークの街、西荻窪」のイメージを持った新規個人商店に出店の機会が多く訪れたこと。これ

---

12 第 5 回西荻学習会にて。
13 筆者調べ。
14 籾山らの研究においては、東京の主要な都市情報誌「Hanako」「東京 walker」「散歩の達人」において、「〇〇の街」というキーワードで紹介されている街の中から、約 50 店舗異常の同業種店舗が集結している専門店街を抽出している。
15 駅前には戦前の闇市の名残を残した一画が存在する。

らの要因が組み合わさり、西荻窪の文化的イメージは形成・発展してきたといえる。

第 3 章　西荻窪の商店街に関する考察

この章では、神明通りの商店群が地域コミュニティを担い手となる可能性を探る為に行なった現地調査を基にした考察を行なう。まず、調査地全体と西荻窪駅北口の商店街の特徴を整理した上で、神明通り商店群を含む南口の商店街との比較をする。その後、神明通り商店群に照点を当て、地域コミュニティの活性化の鍵を握る西荻窪案内所の役割について述べる。

1. 北口と南口の商店街比較

西荻窪駅南口から始まる西荻神明通り商店街に対し、西荻窪駅北口にも商店街が広がっている。この項では、南口の西荻神明通り商店街に対する比較対象として、北口の商店街にも目を移してみたい。北口は、南口に比べて、日常生活の買い物というより、こだわりの骨董品を扱うマニア向けの店や、洒落た食事を提供する店が多く並んでいる印象を受けた。その為、マスコミで西荻窪を取り上げられた際に発信されるのは、たいてい北口である。

西荻窪の情報をまとめた『西荻ねっと』の商店街紹介ページによると、西荻窪周辺には 23 の商店街が存在する [西荻窪商店街連合会, 2010]。その地図によると、西荻窪駅北口にある商店街は、「西荻伏見通り商店街振興組合」、「西荻北銀座本町会」、「女子大通り商和会」、「西荻ステーション街商店街」、「西荻窪銀座会」、「西荻一番街商店街」、「広小路新栄会」、「西荻北銀座銀商街」の計 8 箇所。この地域一帯でも調査活動を行なった[16]。

北口で強く見られる商店の特色は、飲食店の多さである。特に、スペインバルや自然食、手作りパンや、若い女性向けのカフェ、食堂が顕著である。次いで、アンティークやアートのギャラリー、古本屋で、これらは昔ながらの店と新店が混在しているようであった。主な顧客層は 10～30 代の女性。また、これらの店では多数のパンフレットを置いている点が目立ったが、これについては後ほど扱う。

2. 神明通りの商店群

この項では、本論文で焦点を当てる神明通りの商店群の現状を観察し、そこにある課題を明らかにする。

神明通りのある西荻南ゾーンは、武蔵野台地の東京区部の山の手台地に位置している。江戸時代は全域が農地や雑木林だったものの、明治・大正にかけて町となり、最寄駅の西荻窪駅周辺は、

[16] 筆者調べ。2013 年 11 月～12 月。

商業地域及び近隣商業地域として発達してきた。その周囲には落ち着いた住宅地が広がっている。

まず、神明通り沿いの焦点を業種別に分類した。徒歩で約 15 分の距離があるこの商店街には、まばらに約 30 店舗ほどの店が軒を連ねているが、そのほとんどが飲食店である。次いで、駅近くに八百屋、酒屋、不動産店、整体が多い。また、駅を離れると、コーヒー豆専門店、豆腐屋、鮮魚店が突如現れ、特徴的になっている。店舗の歴史性から分類すると、10 年以上看板を掲げている店舗（2013 年 12 月 4 日現在）は、コーヒー豆専門店が 2 店、酒屋が 2 店、蕎麦屋が 2 店、八百屋が 2 店、寿司屋が 2 店、中華料理店が 1 店、豆腐屋が 1 店、鮮魚店が 1 店、居酒屋 1 店（同年 11 月、ほか 1 店が閉店）、定食屋が 2 店、煎餅屋 1 店、裁縫屋 1 店となっている。10 年以下の店舗は、雑貨屋 3 店（同年 9 月、ほか 1 店が閉店）、レストラン 3 店、整体 2 店、花屋 1 店、ドーナツ店 1 店、美容院 1 店等である[17]。

次に、通りを歩く人を観察した。この通りは駅から住宅街へ直線で伸びていることもあり、通勤通学等で利用する人が最も多い。夜になると、少数の大人が居酒屋や寿司屋へ入るところも見受けられる。また、この通りは周辺道路の抜け道として利用されるため、自動車の通行量が大変多く、ゆっくりと立ち話している人は少ない。やはり、駅と家を行き来するための道路として利用している人が圧倒的に多いようである[18]。

そのような神明通り商店街に、最近変化が起こっている。吉祥寺ブームの波及が隣駅の西荻窪にも及んできたのである。1 年ほどの間に、神明通り商店街にはアンティーク家具、レトロ雑貨、オーガニック食品を扱うカフェ等が次々と開店している。そのため、それら目的でやってくる若い女性層の人々が商店街を歩く姿を見受けられるようになった。　それらの店は長い商店街のある一部に隣り合って密集しており、そこだけ違う町のような雰囲気になっている。その箇所だけ違う町のようであるというのは感覚だけではない。定期的に開催されている「ハロー西荻」という町歩きイベントでは、西荻窪周辺の店や住民が協力して特別なプレゼント等を用意し、参加者に振舞っている。しかし、その新住民一帯はイベントに関わっておらず、ハロー西荻の公式ホームページの西荻お薦めショップの地図にも登録されていない[19]。この状況が示唆するのは、同じ商店街の住民同士の信頼関係が深いとは言えないということである。

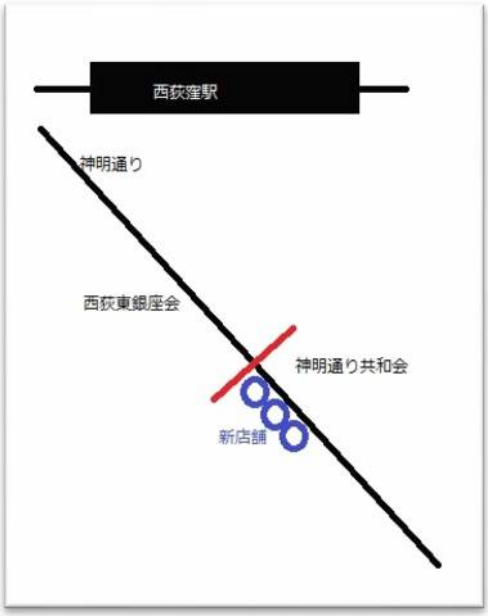

図 5 神明通り見取り図(2013.12.9 作成)

この情報からわかったことは、神明通りの商店街は

[17] 筆者調べ。2013 年 12 月 4 日現在。
[18] 筆者調べ。2013 年 10 月 14 日現在。
[19] 筆者調べ。2013 年 10 月 6 日確認。

シャッターや駐車場の多い静かな通りから、新しい担い手による店通りへと環境変化を始めているということである。しかし、地域のイベントによって、古い担い手と新しい担い手の間には距離感があることが明らかである。

-

また、神明通りの商店群は、西荻東銀座会と神明通り共和会で構成されている。西荻窪駅南口から途中までが西荻東銀座会、その途中から荻窪駅方面へ神明通り共和会となっている。

さらに、上記で挙げた「神明通りの新しい店」は、まさにその 2 つの商店街の分かれ目から、神明通り共和会の始まりに密集している（図 5）。各商店街を紹介する西荻ねっとによると、西荻東銀座会の加盟店は 58 店。神明通り共和会は、40 店である［西荻窪商店会連合会, 2010]が、近年はその多くが閉店している。その為、空き店舗が生まれ、若手の店主達に出店のチャンスが訪れているのである。

次の項では、神明通り共和会が衰退した原因と、西荻東銀座会には新店舗が出店せず老舗が残っている原因を明らかにしたい。

3. 衰退の原因に関する考察

前項で、神明通り共和会は商店街としての機能を低下させ、多くの空き店舗を出し始めていることが明らかになった。この項では、その衰退の原因を明らかにするために、歴史的側面から神明通り共和会の現状を参照し、考察を行なう。

前述でも参照した新の理論では、商店街の衰退の原因が 3 つ挙げられている。消費者第一のバリュー主義、コンビニエンスストア、そして公共事業の拡大による商業圏の郊外化である［新雅史, 2012, ページ: 140-191]。

1950 年代中頃、経営学者・林周二は、零細小売業という前近代的な経営スタイルの非効率性を取り上げた流通革命論を唱えた。そして、その流通革命論の影響を受けつつ、事業を拡大していくダイエーの中内功という人物が現れ、商店街は衰退へと追い詰められていく。ダイエーは、1957 年に大阪で開店した後、「価格破壊」というフレーズを掲げ、全国にスーパーマーケットを展開していった。さらに、ダイエーの創設者中内功は製造業が価格決定権を持っている状況に批判的で、価格決定権は消費者に近い立場が持つべき（バリュー主義）だと考えていた。そのようにして挙げられたバリュー主義は、コストを減らすには販売者の所得を下げても仕方ないという考えに基づいていた。それゆえ、製造業とある種の依存関係を築くことで既得権を持ち続けていた商店街の零細小売業は、小売業の価格競争に巻き込まれることになった。つまり、消費者を優先してコミュニティの一員である販売者を切り捨てることでもあり、この理念の普及は最終的に商店街の凋落を招くことになったといえる。西荻窪駅には、高架下に大手スーパーマーケット SEIYU があり、その存在が生活用品を扱う零細小売業へ影響したと考えられる。

また、1974 年日本で初めてのコンビニエンスストアであるセブンイレブン 1 号店が開店したことも、商店街の衰退の一因となっている。コンビニエンスストアは、日本において急速に数を

増やしていったが、その多くは元零細小売店によって経営されていたという点が重要になってくる。コンビニエンスストアは、跡継ぎ問題を抱えた小売店の解決策として普及したのである。前近代は、事業の継続を第一とし、経営体としての疑似血縁制度をよしとしていたため、家族内の跡継ぎが途切れても事業は維持されていた。それに対し、近代家族に支えられた零細自営業は、家族の中に跡を継ぐ意志を持つ者がいなくなればその時点であっさり事業を辞めてしまう。それゆえ、事業の継続よりも家族を養う利益の確保が優先され、コンビニエンスストアへ転換する家族が増えたのである。しかし、コンビニエンスストアはひとつの店舗で生活用品全般を扱う形態であるために、専門店群で生活用品をカバーする性質を持っていた商店街のバランスを内部から崩壊させる原因となった[新雅史, 2012, ページ: 191]。神明通りにあるセブン-イレブンも、零細小売業から転身した例である。もともと、酒屋でありながら何でも扱う店を営んでいたが、数年前にコンビニエンスストアへ転換した。現在も、酒屋の元ご主人がオーナーを勤めている[20]ことからも、事業の優先度が低いこの理論が当てはまることがわかる。神明通り共和会も、このコンビニエンスストアの延長線上に存在することから、その影響を少なからず受けていると考えられる。

最後に、バブル崩壊後の公共政策が小売業の環境を変化させた点を挙げたい。かつて、日本の消費空間は住宅からの徒歩圏内に集約されており、戦後日本の零細小売業に対する規制と相まっていた。しかし、1990 年代にこのような日本的な消費空間の在り方に大きな変化が訪れる。変化の 1 つ目は、流通の規制緩和によって大規模な小売業の郊外進出が容易になったこと。2 つ目は、地方都市の郊外化が進んだことである。公共事業の拡大による地方の道路事業が進んだことにより、郊外へのアクセス道路である国道バイパスが次々と開通され、商業用の土地が大量に発生したのである。これらは、大規模ショッピングモールをはじめとする郊外の商業化を加速させ、さらに地方の小都市同士を結ぶバイパスによって住宅街の商業圏を前提としていた商店街秩序を根底から覆されたのである。西荻窪周辺の地域住民も、環八通り、高井戸インター付近にある大型店へ出かけることも多いとのことである[21]。

堀川らは、近隣型商店街や地域型商店街等の地域住民と関わりが大きい商店街は他の商店街と比べて「衰退している」と回答した割合が高いという調査結果を出している [堀川三好, 野中, 菅原, 2011, ページ: 19]。また、経営者の高齢化や兼業商家の増加による個店の経営意識の低下も見られる。これらが、商店街における組織力の低下に影響を与える問題であるとしている [堀川三好, 野中, 菅原, 2011, ページ: 20]。

つまり、神明通り共和会の衰退は、近隣型商店街であったこと、そして経営者の高齢化が進みながらも、近代家族特有の後継ぎ問題から空き店舗が増えたことが原因にあると考えられる。

それでは、現在でも活発な商店街の元気の源はどこにあるのだろうか。衰退の一途を辿る商店街には無い特徴を明らかにするために、西荻窪東銀座会と、西荻窪駅の北口を占める商店街を例

[20] 現在も「らっしゃい！」という威勢のよい掛け声が健在であり、酒屋の名残を感じさせる。
[21] 筆者調べ。

に挙げて分析を行なう。

西荻窪東銀座会で注目すべき特徴は 2 点ある。1 つ目は、地域住民を巻き込む活発な催し物の開催。2 つ目は、西荻窪外からの集客力のある店舗の存在である。西荻窪東銀座会では、昭和 50 年から毎月第 3 日曜日に朝市を、そして桜のライトアップや正月の獅子舞など、季節ごとの祭りを開催している。普段は、人がまばらな神明通りも、これらの催し物が行なわれる時間帯は地元住民で賑わわせている。また、この商店街付近には三ツ矢酒店や蕎麦処つる屋といった名の知れた老舗が存在する。つまり、田村の商店街分類方法［田村三智子, 2007, ページ: 16]における「地域型商店街」、あるいは「広域商店街」的な要素を、西荻東商店街は含んでいるといえる。それゆえ、この商店街は古き店を残しながら現在にいたったのである。それに対し、「近隣型商店街」であり持ち続けた神明通り共和会は、地元外の集客力を十分に得ることができず、空き店舗を出す商店街になってしまった。

西荻窪駅北口の商店街で挙げたい特徴は、顧客層の多くを地域外住民から獲得しているという点である。前項で調査したように、西荻窪駅北口の商店街にはレストランや古本屋、カフェ、アンティーク雑貨店やギャラリー等の個人商店が多く見られる傾向がある。これらの商店は、メディアで取り上げられることが多く、外部から多数の若い女性客を呼び寄せている[22]。すなわち、西荻窪駅北口の商店街では、既に代替わりがかなり進行しており、「超広域型商店街」、「広域商店街」［田村三智子, 2007, ページ: 16]の要素を持ち始め、近隣ではなく外部からの利益によって経営を成り立たせていると考えられる。

しかし、これらの商店街群も、もとからこのような姿だったわけではない。かつては、八百屋や魚屋といった生活用品を扱う店が軒を連ね、その中にぽつぽつとアンティーク雑貨を扱う店があるような商店街だったのである。しかし、時代の流れとともに先に述べた商店街衰退の要因と西荻窪アンティークのブームが相まって、外部からの顧客を得やすい店が生き残っていった。その結果形成されたのが、西荻窪駅北口周辺の商店街の今の姿なのである。

つまり、神明通り共和会は、昔ながらの商店街から西荻窪駅北口のような商店街への変化を始めている。それは、近隣型商店街から地域・広域型商店街への変化でもあり、地域住民との関わりの減少を招く可能性がある。しかし、商店街内が時代の流れに合わせて新しい変化を始めることは決してマイナスではない。重要なのは、商店街が新しい姿へ変化しながら、地域コミュニティとしての機能を担っていくということである。

4. 憩いの場、語りかける看板

前項では、西荻窪東銀座会が古き歴史を受け継いでいると記した。一方で、同じく前述したセブン-イレブンを始め、新しく入れ替わった店があるのも事実である。しかし、それらの店には共通のある特徴を見てとることができた。それは、地域住民との交流の場を持っているというこ

[22] 北口の某カレー店では、外に並ぶ客 8 名中 8 名が 20~30 代の女性。（筆者調べ。2013 年 12 月 7 日）

とである。

前項で取り上げた出た元酒屋のセブン-イレブンは、ある日突然、店前にお手製のテーブルクロス付きの簡易なテーブルセットを出し始めた。店内に飲食用のカウンターを併設しているコンビニエンスストアは見かけるものの、道沿いにお手製テーブルを出す店は滅多に見かけない。そこで、店主にテーブルを出した理由を聞いた。

> 「あ、あれはセブンカフェを入れたからね、売上げが上がるかなと思ってね。ニーズは少ないですけどね、はは。でも、お昼時はおじいさんやおばあさんが使ってくださってるからよかったと思ってますよ。」(2013 年 12 月 13 日)

たしかに、おじいさんやおばあさん、スウェット姿の若者やサラリーマンがちらほらと休憩している。その手にセブンカフェを見かけることはない。それでも、オーナーは満足そうに良かったと語っている。最初の目的は売上増加だったものの、地域住民が憩う場になったことで結果良しと考えているようである。

また、神明通り沿いにある整体やカイロプラティックの専門店 A が置いている、店先の立て看板も特徴的である。その立て看板には、店名やメニューではなく、「今日はこんな日」という店主のつぶやき[23]が毎日書き込まれているのである。語りかけるように書かれた看板を、通りすがる人はちらっと目に留めている。

そこで、この整体店のホームページを調べてみることにした。すると、そこには、「顔の見えるカイロプラクター」というキャッチコピーが付けられている。同ホームページの店舗紹介部には、以下のような店主の言葉がある。

> 「地域の方とできるだけ顔の見えるおつきあいができるよう、商店街・町内会の活動や、その他街のイベントなどにも積極的に顔を出しています。」[西荻窪の整体は「顔の見えるカイロプラクター」]

語りかけるような看板から、新しく商店街に加わった店も積極的に地域との交流を図っていることが読み取れる。商店のつながりが強く、活発な地域活動をおこなっている商店街では、新たに加わった店主も同じように地域との交流を持っていることがわかった。

5. 神明通り共和会の新店舗

この項では、神明通り共和会にできた新店舗の特徴について考察する。特徴の 1 つ目は、地

[23] 例えば、「○月○日 昨日のお客さんの一言『―――』。今日はその言葉を胸にがんばります。」「○月○日　今日は日本で初めて○○した日だそうです。」等。

域交流について、2 つ目は、常連の存在である。考察には、この商店街に今年オープンした新店舗、雑貨店 B と飲食店 C への実地調査[24]の結果を参照する。

今年の 9 月頃、オープンした雑貨店 B 店は、他の街に住む 30 代の女性が経営するお洒落な小物や文房具を扱う店である。オープンして約 3 カ月、地域の交流について、出店にこの地を選んだ理由について尋ねてみた。地域の交流については、ある、と答え、その理由として、「隣近所の店（新店舗に挟まれている）と交流がある」こと、「昔から居る店主とにはオープン前にお話を聞いた」ことを挙げた。そして、雑貨店が多い駅北口ではなく、南口を選んだ理由としては「空き店舗が無かったから。ここがたまたま空いていた。」と答えた。

この回答からわかるのは、B 店の地域交流の中に、昔から居る店主の存在が薄いこと、そして地域の住民が無いことである。商店街の活動への参加、住民と関わりを積極的に取り入れている整体店 A とは異なる結果となった。また、出店理由としては、前述した、神明通り共和会の機能が低下し、空き店舗が多数出たことによるものであることが明らかである。

今年の 4 月末にオープンした飲食店 C は、健康的な食事とセラピーを提供している。話を聞くために朝 7 時から出している「朝ごはん」へ向かった。

ここで特徴的だったのは、常連の存在である。他の街に住む常連がそのままキッチンに入り、朝ごはんの提供時間が終わるとカウンターへ回って朝ごはんを食べる。その間は、店主と仕事や料理の話をしながら、後から入店した知り合いや常連と挨拶をしている。私を始め、店の奥に座っていた若い女性 2 人組は、なんとなく口数が少なくなっていた。この店は、新店舗ながら少数の常連が付いているようであった。

そこで特徴的なのは新しい客や地元住民を引き寄せるというより、同じ趣味を持った人々を遠方から呼び寄せているような店の在り方である。実際、外から店内をのぞき込む近所のおばあさんがいた際も、「あれ、見てる。」と少し笑ってそのままにしている場面があった。この飲食店 C の主な顧客層は、常連と遠方からの客であり、地元との交流には積極的でないことは明らかである。

6. 駅北口方面のパンフレット

この項では、店頭のパンフレットから読みとれる店舗関係について記したい。西荻窪周辺の商店街で回収したパンフレットのうち、駅北口方面の店舗は半数以上の割合を占めた。しかし、そこから駅南口方面でも見られたパンフレットを除くと、ある特徴が見られた。それは、他店の広告や商業的キャンペーンのパンフレットを置く傾向である。

まず、店舗ごとに置かれていたパンフレットの平均個数を比較すると、駅南口方面は平均 2 種類だったのに対し、駅北口方面は平均 5 種類となった。駅北口で見られたパンフレットのう

[24] 筆者調べ。2013 年 12 月 13 日。

ち、駅南口方面でも回収された物を引くと、残った物は同じコンセプトを持った店を集めた『西荻窪アンティークマップ』、12 店舗が世界各国のクリスマス商品を集めたキャンペーン『ニシオギセカイツアー』、そして他店の広告であった。駅南口方面でも回収されたものは、タウンペーパー『西荻丼』、西荻案内所発行の『西荻学習会』、『西荻まち歩きマップ 2013』である。

駅北口方面の商店のパンフレットは、顧客の共有や、季節の商品特集等、商業的利益を目的としている傾向がみられた。前述の考察の通り、西荻窪駅北口の商店街は、広域型商店街として遠方からの集客が重要であるため、商業的アプローチが適切になっていることが理由として考えられる。それに対し、近隣型商店街、地域型商店街の機能を残す駅南口方面の商店街は、地域情報誌等、地域住民にニーズのあるパンフレットを置く傾向があるといえる。

7. 西荻案内所と西荻夕市・西荻学習会

この項では、前項で回収した地域情報誌を発行している西荻案内所に注目したい。西荻案内所は今年 3 月に西荻窪駅北口の伏見通り商店街の路地裏に開かれた地域情報発信所である。

西荻案内所は、ボランティア 5 名で運営される地域案内所である。ボランティアメンバーには、前項で挙げた『西荻丼』の前編集長も含まれている。案内のほか、地方から届いた野菜の販売や、モーニング、「102 歳のおじいちゃんが淹れたコーヒー」の提供、西荻関連雑貨の販売も行なっている。案内所が関わる催し物には、西荻学習会や西荻夕市などがある。

西荻学習会は、西荻にまつわる歴史や文化を学ぶ集会である。第 5 回は、「ちょっと昔の西荻」。参加は自由で、「昔の思い出話と写真をお持ち寄りください。」と但し書きが付いている。参加者約 20 名の大半は、昔から西荻に住むおじいさんやおばあさん。しかし、筆者を含め 20 代の女性は 3 名ほど参加していた。会では、昔の写真はもちろん、昔の印鑑や書籍など、参加者が思い思いの持ち物を持ち寄り、今の西荻窪と当てはめながら語り合っていた。

西荻夕市は、2009 年に西荻のお茶屋が主体となって始められた催し物である [西荻夕市]。集客だけではなく、店同士のコミュニケーションも目的である、と案内所のスタッフはインタビューで答えている [大塚幸代, 2013]。また、西荻案内所の目的として、スタッフは以下のように答えている。

図 6　第 5 回西荻学習会の模様

「西荻のお店って仲が良くて、ツイッターでフォローしあったりしているんですが、中には乗りそびれているお店もあって。西荻の一体感が出るといいなあ、と考えているんです。（中略）そして若い人のお店は、商店街に入らないので、状況は複雑で。そういった中で、一体感が出せたらいいなと。 この案内所や、夕市をHUBにして、盛り上がれたらいいなと思っています。（中略）若い人も入ってきているんですが、接続が悪いんです。先日、85歳くらいの方がここにあらわれて、『最近の西荻はダメだ。おみこしの担ぎ手はいないし、防災訓練には誰も来ないし、どうなってるんだ』って言うんです。その人は、西荻で行われているイベントも全く知らないんです。その人の目から見たら、西荻は、知らない店ばかり、シャッター商店街と同じなんです。どこの街も抱えている問題なのかもしれませんが、会えてない人を会わせるシステム、そういうものが必要なんじゃないかと思います。」［大塚幸代, 2013］

西荻案内所は、人の声が集まる場所、第三者の視点を持つ場所、地元住民を集める魅力がある場所である。そして、西荻窪を訪れた人や住む人の為の案内所であるだけでなく、西荻窪の商店街と商店街、そして商店街内の「若い人のお店」と昔ながらのお店をつなぐ存在としての活動を始めている。そしてその活動は、地域情報誌の到達範囲から、駅北口方面だけでなく、駅南口方面にも波及し始めていることが明らかになった。

第4章　実地調査の考察

この章では、前章での実地調査から西荻窪の商店街の地域コミュニティとしての機能性を考察する。

まず、神明通り沿いの商店街から、商店街の地域コミュニティとしての活発化度は、催し物や地域への関与へ反映されていることが明らかになった。活気を失った商店街には空き店舗が出るが、西荻窪ではすぐに若年層の店主が店舗を出す状況にある。しかし、その新店舗は、既に地域活動が停滞し始めている商店街に加わることになる為、地域交流に参加する機会が必然的に少なくなっている。また、近隣型商店街としての役割を失った商店街には、広域型商店街の機能を持った商店が集まるしか生き残る術はない。そのため、新しい店舗は、外部からの顧客を取り入れる、「アンティークの西荻窪」というコンセプトに合った商店、あるいはその顧客層にマッチングする飲食店に偏る様子が見られた。それゆえ、新店舗は、新しいコミュニティを築こうとした取り組みをした時、商業的利益が目的の催し事や交流に留まりがちになる。それは、昔ながらの商店街を残す西荻窪東銀座会の催し事とは異なる性質を持ったものだった。つまり、新店舗の商店街は、地域の担い手としての役割が薄くなっているといえる。

また、西荻窪駅北口の商店街と西荻窪東銀座会の性質は異なっており、神明通り共和会はその過渡期にいるといえる。同じ地域にある商店街といえども、その性質は様々なのである。したがって、商店街が地域コミュニティとしての役割を担う為には、ひとつの商店街内の新旧という二項対立の議論ではなく、旧から新へ変化するに当たって、どのように地域全体の担い手として育てていくかが重要である。昔ながらのコミュニティを築く商店街と、新たなコミュニティを築き始めている商店街の交流を作り、地域全体のコミュニティの担い手としての意識を継承する機会が求められる。そして、その際には、西荻案内所のような、商店街や新旧の垣根を越えて全体から地域を見渡す存在が鍵を握る。

また、西荻案内所がボランティアスタッフによって運営されていたように、このようなハブ機関には運営コスト面で課題がある。したがって、地域のハブの継続的な運営には、商店街や駅、行政といった地域の理解と協力が欠かせないという視点も忘れてはならない。

以上から、神明通り商店街群において地域コミュニティを活性化させるためには、西荻窪駅南口への地域交流のハブ設置という方策に辿りつく。この策を実施するならば、駅南口方面で最も地域活動が盛んな西荻東銀座会と、先行例である西荻案内所の協力が欠かせない。それゆえ、西荻東銀座会に属する昔ながらの店主と、新店舗の店主の両方と交流がある人物を中心として、西荻案内所南口派出所を設立するのも一策として考えられる。また、設置箇所は、西荻東銀座会と新店舗が増え始めている地帯の中間点、あるいはどの商店街にも属さない地点が適している。そして、継続的な運営コストの課題には、地域・行政の支援が解決策になる。

終章 結論

これまでの考察によって、商店街はその誕生特性から地域コミュニティとしての役割を担うことは可能であるが、西荻窪のようにその性質を変化させ始めている商店街があることが明らかになった。それは、大型商業施設や交通の利便化によって、商業圏が拡大したことで近隣型商店街として生き残ることが困難になった時代背景がある。そのような時代背景によって、多くの商店街は外部から顧客を呼び込めるコンセプトをもった若い担い手の商店に占められるようになり、広域型商店街として活気を取り戻していた。時代に合わせた商店の工夫によって、商店街や地域の活性が成功しているともいえる。しかし、その性質上、地元より外部からの集客力が強いこと、昔からの担い手の減少や、広域型商店街の性質、商店街ごとの交流機会が少ないことから、若い担い手の商店は地域コミュニティとしての意識を持ちにくいことも明らかである。それゆえ、新旧の店舗だけでなく、地域全体に広がる商店街をつなぎ、活動を共有することで地域コミュニティの担い手としての意識を普及させることが必要であるといえる。

そして、地域をつなぐ役割として、商店街や新旧の担い手をつなぐことのできる第三者の存在が浮かび上がった。その存在は、外部から訪れた人々だけではなく、地域のハブとして活動を始

めている。しかし、第三者であるがゆえに、継続的な運営に関する課題が明らかになった。それゆえ、今後はハブの必要性に対して、地域の理解を得る努力を継続しなければならない。この課題を乗り越えて活動を拡大し、新旧、そして商店街同士を繋ぐことに成功すれば、新しい商店街は、また新たな形で地域コミュニティの担い手となり地域に根付くことができるだろう。

文献目録

(日付不明). 参照日: 2013 年 12 月 17 日, 参照先: 西荻窪の整体は「顔の見えるカイロプラクター」: http://vivacechiro.net/
レベッカ・ソルニット. (2010). 災害ユートピア―なぜその時特別な共同体が立ちあがるのか―. 亜紀書房.
伊藤滋. (2002). 東京生まれの東京論―東と西の文化が共生する都市―. PHP 研究所.
井伏鱒二. (1982). 荻窪風土記. 東京: 株式会社新潮社.
経済産業省. (2009). 「平成 19 年商業統計表」.
佐藤郁哉. (2008). フィールドワーク増訂版―書を持って街へ出よう―.
新雅史. (2012). 商店街はなぜ滅びるのか―社会・政治・経済史から探る再生の道―. 光文社.
陣内秀信, 三浦展. (2012). 中央線がなかったら―見えてくる東京の古層―. NTT 出版株式会社.
西荻窪駅. (1972). 西荻窪の沿革. 西荻窪駅 50 年のあゆみ.
西荻窪商店会連合会. (2010). 西荻ねっと. 参照日: 2013 年 12 月 9 日, 参照先: http://www.nishiogi-net.com/index.php
西荻窪商店街連合会. (2010). 「商店街」を地図で探す. 参照日: 2013 年 10 月 8 日, 参照先: 西荻ねっと: http://www.nishiogi-net.com/street_05.html
西荻夕市. (日付不明). 参照日: 2013 年 12 月 17 日, 参照先: http://nishiogiyuuichi.tumblr.com/
大塚幸代. (2013 年 8 月 9 日). 町の人と人をつなぐ、西荻案内所. 参照日: 2013 年 12 月 17 日, 参照先: 地球のココロ: http://chikyu-no-cocolo.cocolog-nifty.com/blog/2013/08/post-1828.html?page=1
田村三智子. (2007). 地域住民のネットワーク形成に関する一考察 ―商店街活性化研究からのアプローチ―. 沖縄大学法経学部紀要(9), 15-21.
内田由紀子, 高橋義明, 川原健太郎. (2011). 東日本大震災直後の若年層の生活行動及び幸福度に対する影響. 内閣府経済社会総合研究所.
堀川三好, 野中大志郎, 菅原光政. (2011). 地域型商店街における地域活動情報の活用について. 日本経営工学会論文誌, 岩手県立大学.
籾山真人, 渡辺貴介, 羽生冬佳. (2000). 東京 23 区における専門店街の形成過程に関する研究. (日本都市計画学会, 編) 都市計画論文集(35).